俺妹のいわおがこんなにロックなわけがない

nasigorenn

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

本編においてまったく関わりがなかった田村　麻奈実の弟である田村　いわお。そんな彼がある日原因不明の病により高熱を出して意識不明の重体になってしまった。しかしそれも一週間で収まり身体は健康に戻った。だが……『中身はそうじゃなかった』。

記憶はあるのに本人の意識がまったく別人のようになってしまったのだ。それもとあるブラックな運送屋の見習い水夫のように……。

これはそんな『ロック』が姉の為に頭を使って姉の恋を成就させる話である。

目次

第1話　こうして彼は『ロック』になった。 ―― 1
第2話　こうして彼女から『切り札』を得た ―― 9
第3話　こうして彼女は聖母になった ―― 17
第4話　こうしてロックは切り札を切った ―― 27
第5話　こうして『物語の始まり』は始まった ―― 40
第6話　こうして彼女と彼は結ばれた ―― 49
第7話　こうしていわおはロックと成った ―― 65

第1話　こうして彼は『ロック』になった。

彼は和菓子屋の倅として生まれ、これまでの人生をそれなりに過ごしてきた。
優しい祖母やノリのよい祖父、しっかり者の母に寡黙だがきっちりとした父、それに本当に怒るとかなり怖いが普段は日向のように暖かな優しさをもつ姉。そんな家族に囲まれながら幸せな日々を過ごして来た。
そんな彼の世界には家族以外にも様々な関係があり、その中で特に繋がりが深いといえば『高坂　京介』だろう。彼からしたら歳が幾つか上の幼馴染みにして兄貴分。正確に言えば姉である田村　麻奈実の幼馴染みであり、彼は姉がよく遊ぶ相手で一緒にいることが一番多い事を知っている。勿論姉がこの人物に恋慕の情を抱いているということは付き合い始めたころから知っている。彼としてもこの兄貴分になら姉を任せて良いと思ってるし、それに彼自身実の兄と思っても遜色無く慕っている。
そんな家族や兄同然の存在に触れあいながら育った彼は所謂『餓鬼』であった。調子に乗りやすく気さくな性格なのだが、残念な事に簡易的な中二病を煩っていたのだ。自分の頭を五厘刈りにした際に高坂　京介に、
『格好いいだろ、あんちゃん！　今日から俺のことはロック（いわお）と呼んでくれよ！』

というくらいには可哀想であった。

そんな彼こと田村　いわお、今回からは『ロック』としよう。ロックはそれ以降からもこの呼び方を通しているわけだが本人は格好良いと思っている。だが兄貴分である京介からは若干笑い込みで呼ばれていた。既に中学二年生、京介の妹と同い年なのにその中身はまだまだお子様だと言わざる得ない。

そんなロックであるが、この度原因不明の病気にかかってしまった。

症状は風邪なのだがその熱があまりにも高すぎる。３９～４０度の高熱に晒され意識が混濁するという事態。当然医者に診せたのだが病状は判明せず仕方なく入院。それが一週間続いたが、その後に熱も下がり身体はすっかり健康に戻った。

そう、身体は健康になったのだが……。

「ロック～、早く起きないと学校に遅刻するよ～」

人を起こすのにはかなり不向きなのんびりとした声を扉越しにかけられた。声の主がロックの姉であることは声を聞けば分かることである。故にロックも直ぐに応答する。

「あぁ、分かってるよ……『姉さん』」

「う、うん、分かったよ……」

ロックの返事に姉である麻奈実から戸惑いを隠せない声が戻って来た。

彼女が未だに戸惑うのも仕方ないことであった。何せ病気から回復したロックは『性格が変わっていたからだ』。

今までのロックはお調子者な子供らしい男子であり、姉を呼ぶときは『姉ちゃん』と呼んでいたが、あの高熱以降ロックの人を呼ぶ時の人称が変わった。姉ならば姉さん、父ならば親父、母親はお袋であり祖父は爺ちゃん、祖母ならば婆ちゃん。祖父母に関しては変わらないが、両親や姉の言い方が変わっていた。

そしてそれに伴い性格も変わりきってしまっていて、それまでの子供っぽい性格から歳不相応なまでに落ち着きを見せ始めたのだ。まるで社会人のような落ち着きぶりに姉である麻奈実でさえ年上に見えそうになったくらいである。

結果だけ言えば別人のようになってしまったロック。勿論医者に問い詰めることになったのだが、高熱で脳に何かしらあったかもしれないということしか分からず、調べられる限り調べたが脳は正常、原因不明であった。故に今現在は経過観察の様子見しか出来ない状態になっていた。本人自身の記憶はしっかりあるし気にしていないので本人としては問題ないらしい。

そんなわけで言うなれば『新生ロック』は麻奈実に起こされて普通に起きて家族とともに食事を取る。家族に声をかけると皆戸惑いつつも受け入れてくれていた。

学校でもロックの扱いについてはかわってしまい、今までのように馬鹿な真似は出来なくなったようだ。まぁ、本人も気にする様子はなかった。

そしてロックは日常を過ごしていく。

そのまま過ごしてそれなりの人生を送るはずだった。

だが、いわおはロックになってからあることが気になって仕方ない。それは……。

「姉さん、一体いつになったら京介さんに告白するんだ？」

「ふぁっ!?　ろ、ロック、何言ってるの!?」

高校生にもなって未だに進展のない姉のことである。尊敬する兄貴分の事を慕っている姉がもう長い年月片思いを続けているのに未だに告白の一つもしないことがロックには不安だったのだ。姉にはこれまでかなり世話になってきたし、兄貴分である高坂京介にも親しくさせてもらってきた。二人がくっつくことに反対はない。寧ろくっついてくれた方が嬉しいと感じるくらいだ。それは家族全員の思いでもある。

だが、そんなに皆が願っているというのに二人の仲は進展を見せない。京介が泊まりに来て姉の部屋に一緒に寝ることがあっても、二人の仲は未だに『友人以上恋人未満』な

のだ。見ている側からすればもどかしい上このうえない。当人同士の話といえばそうなのだが、もどかしいものを見させられている身としてはたまったものではない。

だからこそ、こうして姉に発破をかけたのだ。

姉はロックにそう言われると顔を真っ赤にして慌て始める。身内びいきではあるが、恥じらいながら慌てる姉は見ていて可愛らしい。男なら誰もが見入ってしまうと思われる。

「何でも何もそのままだ。もう高校生なんだ、くっついてもおかしくないし寧ろ遅いと言われてもおかしくない。だというのに未だに二人の仲は進展無しだ。いくら姉さんが初心で純情だろうが限度というものがあるだろ。それに未だに告白していないということは今の姉さんの反応を見れば分かる」

姉のためを敢えて厳しめにそういうロック。麻奈実はそう言われ更に慌てるのだが、それでは話は進まないだろう。だからこそ、ロックは更に深い話をすべく近くにあった椅子に座ると足を軽く組んで片手を口元に添えてから自身の考察を口にする。

「姉さんにこういうのは悪いが、今の状況は『よろしくない』。いや、最悪ではないだけマシではあるが『よろしくない』んだ。いいか、今現在京介さんに恋人はいない。それがまだマシな状況ではあるが、あの人の周りは寧ろ問題がありすぎる。妹さんの友人が約3人程その影をちらつかせている。俺の見た限りでは皆美少女だといっても差し支

えない。寧ろ恋人がいない方がおかしいと思う。二名ほど格好が少しアレだが、素材だけなら一級品だ。その気になれば男の一人や二人は簡単に手玉に取れる逸材といっても言い。その3人がどこまでかは分からないが、皆京介さんに特別な想いを抱いている様子だ。だからこそ、この状態は『よろしくない』んだ」

一体いつ見たんだと突っ込みを入れたくなるが、そこは突っ込んではいけないらしい。ロックがこんな性格になってから彼は随分と観察眼が上がっているようだ。それで京介に会ってからそれなりに調べたんだとか。その結果がこれである。

その答えに麻奈実は知ってるよと暖かに微笑むがどこか悲しそうだ。

そんな姉にロックはまだ大丈夫だと言い聞かせるように言った。

「だがまだ終わりじゃない。結末（エンディング）には到達していない。出演者が増えてきてはいるが、肝心の主役が残念なことに鈍感だ。京介さんは頼りになる人なんだが、どういうわけか恋愛感情に鈍い。性欲とかは思春期なりにあるんだがね。だからこそ、あの人を攻略するに必要な欠片（ピース）を他の出演者が見つける前に此方が手に入れなければならない。それこそが勝利への鍵だ。まずは鍵の入手こそが必要、それを手に入れた後は鍵穴に鍵を差し込めば後は強引にでも扉は開けられる」

回りくどいような言い回しだが、どういうわけか説得力がある。その所為なのか麻奈実はうんうんと可愛らしくも懸命に首を縦に振っている。

そんな姉だからこそ、ロックは応援したくなるのであった。

「だからこそ、姉さんにはその鍵をまず手に入れてもらいたいんだ。これこそが事を進める上で必要な最初の欠片（ピース）だ。これがなければ話にもならない。だが、これが手に入れば状況は逆転する。今まで守勢だったのが此方からの攻勢に転じることが出来る」

「その、ロック……私は……」

何か言いたいが口に上手くだせない。そんなもどかしい気持ちに悩んでいる麻奈実。そんな姉にロックは決め手を突きつける。

「姉さん、酷い言い方になるが事は簡単だ。姉さんが優しいのは分かってる。だからこそ、これは酷な事になるがそれでも言わなければならない。いいか、姉さん……『皆に気を遣って戦わないで負け犬に興じるか』、『あの鈍い京介さんを真正面からぶち抜くか』、どっちかだ。時は金なり、なれど時間は金では買えない。待っていたって物事は始まらないんだ。物語を進めるには自分でページをめくるしかない。姉さんはページをめくるのか？　もしくは本を本棚にしまうのか？　どっちだ？」

その問いかけに麻奈実は真剣な表情を本人なりに浮かべ必死に考える。端から見たら可愛らしい困り顔でウンウンと唸りながら悩んでいるようにしか見えない。これもまた可愛らしい。どうしてこんな姉に兄貴分がドキドキしないのかとロックは少し不

思議に思う。

そんな麻奈実はやっと答えを出した。

「ねえ、ロック……私、その本のページをめくりたい」

その言葉を聞いてロックはニヤリと口元を笑った。待っていた台詞を聞けたからだろう。

だからこそ、ロックは麻奈実に手を差し出しながらこう答えた。

「分かった。姉さん、それじゃ始めようか……姉さんの『恋愛相談』を」

こうして田村　麻奈実の恋愛を応援すべく、彼女の恋物語のいく末を見届けるために、田村　いわお（ロック）の『恋愛相談』が始まった。

第2話　こうして彼女から『切り札』を得た

いわおが変異した事により『ロック』となって始まった物語。
きっとこの物語は綺麗にはいかないのかもしれない。何せ恋愛事というのは得てして綺麗事だけではすまないものだから……。

ロックから恋愛相談を持ちかけられた麻奈実。彼女は大切な幼馴染みの幸せを第一に考えて今まで接してきた。その為なのか少しだけ周りよりも気後れしてしまい、自身の想いよりも周りを優先させてしまうきらいがあった。
だが、彼女は弟に発破をかけられ、やっと……やっと自身の想いと向き合い『戦う決意』を決めたのだった。
そこで彼女とロックが始めることは……。

「姉さんは緑茶でよかったかな？」
「う、うん、ロック。言ってくれれば私が用意したのに」

「これぐらい手間というほどじゃないさ。それに俺はコーヒーが飲みたかったからね。姉さん、コーヒー駄目だろ」

麻奈実の自室にて、ロックがお盆に飲み物を乗せてやってきた。

ロックは麻奈実の部屋に入ると姉に向かってお盆に乗せている湯飲みを麻奈実に渡す。湯飲みからモクモクと上がる湯気が如何にも熱そうであり、それに気をつけるように言うロック。そんなロックから湯飲みを受け取る麻奈実は自身に向き合う形で座布団に座り込んだロックを見た。

ロックは丁寧に座布団の上で胡座をかくと、お茶同様に湯気をあげるコーヒーカップを軽く持って口元に運ぶと舌を火傷しないようにゆっくりと飲み始めた。その姿はとても様になり過ぎていてとても中学生には見えない。

「はわ～、ロック、随分と慣れてるね。とても中学生に見えないよ」

姉らしい少し間延びしたのんびりとした声にロックは苦笑する。

「別に慣れてるわけじゃないさ。俺にはこっちの方が合うらしい。気分的にコーヒーな気分なだけだよ」

そう答えるロックには妙な大人の落ち着きというものが感じられる。その所為なのか、麻奈実は弟と話しているという気がしない。寧ろ年上の大人を相手にしているような気を感じさせられた。

互いに飲み物を飲んでホッと一息つく二人。その光景はまさにのんびりとしたものだが、今はそんな場合ではない。

時刻は深夜であり、朝が早い田村家の面々は眠りについている。家族公認とはいえ恋愛相談というプライベートな問題を相談するにはこの時間帯が好ましいのだ。

「さて……さっそくだけど」

恋愛相談を始めようと声を出すロック。そんなロックを見ながら麻奈実は固唾を？んだ。何せロックの雰囲気が変わったからだ。ソレまでの穏やかな大人らしい落ち着きもさることながら、そこに更に鋭利な思考をする賭博師のような雰囲気を醸し出し始めた。彼女が見てきた人達の中でこんな雰囲気を出す人間は初めてであり、それが余計に緊張を呷った。一体何を言われるんだろうと不安になった麻奈実は若干冷め始めた緑茶を少量口に入れ喉を潤そうとした……が。

「どうして京介さんを好きになったのか？　そこから聞かせてもらおうか」

「ッ!?　けほ、けほ……ちょ、ちょっと、ロック～」

ロックの最初の質問に驚き噎せてしまった。

今更過ぎる質問をされて噎せてしまったことを攻めるように膨れ面でロックを見る麻奈実。だが可哀想というべきか、その顔はまったく怖くない。寧ろそんな顔も可愛らしいのであり、そんな顔をされた程度でロックが戦く理由はない。

「姉さん、これは大切なことなんだ。いいか……『物語（ストーリー）』を作るのに重要なのは設定だ。この設定が細かければより重厚感溢れる物語が描ける。設定に凝り固まりすぎてそれを活かせないのでは本末転倒だがね。だが今回の話はそんな複雑なものじゃない。一人の女の子が抱いた恋物語だ。こういう物語の根幹は好きか嫌いかの二択でしかない。単純（シンプル）なんだよ。だからこそ、最低限度の設定が必要なのさ」

　勿体ぶった言い回しだが様になりすぎているロックに麻奈実は変に関心させられている。だが、それでもやはり実の弟に意中の相手を好きになったのかを語るのは恥ずかしいものがあった。それでも重要だとやんわりとしながらもどこか説得力のある言葉でいうロックに麻奈実は顔を赤らめながら恥じらいつつも語る。

「えっとね、きょうちゃんを好きになったのは……」

　そこから語られるのは実にまぁ青々しく青春真っ盛りな姉の恋バナ。聞いてる此方が恥ずかしくなるほどにベタ惚れな様子が感じられ、ロックはその話が終わるまで身じろぎ一つすること無く聞いていた。

　そして姉の初恋の馴初めを聞いたロックは口元に手を軽く添えて考え始める。その姿が思考しているということを知っている麻奈実は何やら期待の籠もった眼差しをロックに向けていた。

だが残念なことにロックの口から出たのは彼女にとって酷なことだった。

「では次に……どうして京介さんが『昔』と変わってしまったのか？　姉さんなら知ってるはずだ」

まずお前が言うなという言葉を投げかけたくなるが、ここは敢えて言うまい。

ロックの言葉の意味を理解出来る麻奈実は顔色が若干悪くなり悲しそうな顔をする。この質問の意図に関し、実は意外と深い意味があるのであった。

今でこそ平々凡々な高坂　京介であるが、実は最初からそうではない。昔、すなわち京介と麻奈実が知り合ってロック共々付き合いを始めた頃。

その頃の京介は今の京介と違い意気揚々としていて率先して皆を引っ張っていくタイプの人間だった。所謂リーダー気質であり、厄介な問題事に自分から飛び込んで解決する、幼子からすれば皆が憧れるヒーローであった。

だが、それも中学生に上がってしばらくすると辞めてしまったのだ。それまであったヒーロー気質はなりを潜め、歳なりの落ち着きをするようになり問題事にはあまり関わらないようになった。端から見たら京介も中学生になりそれなりに大人としての分別を弁えるようになった様に見える。それはこうなる前のロックから見てそのように感じていた……が、今のロックから見てアレは明らかに『不自然』だ。

それまでの京介と今の京介を比べると明らかにおかしいのだ。別にロックほど激変

したわけじゃないのだが、京介の変異に違和感のようなものがある。まるで……。

「そう、まるで何かを犯してしまい恐れてしまっているような、そんな感じだ」

その言葉が更に核心を突いたのだろう。麻奈実の顔から血の気が引いていく。

その様子が伝わったのか。もしくは鋭い観察眼を持つロックだからこそ気付いたのか、ロックは麻奈実に問いかける。

「姉さん、これは絶対に必要なことだ。これこそが京介さんのターニングポイントだ。それを知らなければ勝利の欠片は手に入らない」

酷い事を言っている自覚はあるのだろう。だがそれでもロックはそれを聞く義務があると言わんばかりにそう告げる。その顔は真剣そのものであり誤魔化すことは不可能だろう。それを悟ったのか、それもと麻奈実が今まで後悔していたのか、彼女はゆっくりと語り始めた。

それは麻奈実と京介が中学に上がってある程度馴染んだ頃の話。

ソレまでと同じく皆を引っ張るリーダー気質の京介はその気質でクラスメイトを引っ張ってきたし問題事があればそれに自ら首を突っ込んで解決していた。当時の麻奈実はその様子をハラハラしながら見ていたらしい。

そうして過ごしていて一つの問題に直面した。それはとある不登校児の話。

京介はそれを聞いて早速その問題を解決すべく首を突っ込んだ。それからまぁ、色々あって不登校児は登校し始めた。そこだけ見れば成功だろう。だが、校外学習で出かけた時、そこで何かあったらしい。結果だけ聞けばその不登校児は腕の骨を折る怪我をし、京介はそれに何かしら関わっているらしい。その原因が自分にあると京介は自身を責め、それを見ていられない麻奈実は『あること』を京介に言ったらしい。どうやらその言葉が原因で今現在の『安全主義の京介』になったんだとか。

麻奈実が悲しそうな顔でそれを語り終えるとロックは顔を下に向けて俯いていた。端から見たら麻奈実同様に悲しんでいるようにしか見えない。

だが……違った。

「……よし」

ロックが浮かべていたのは喜びであった。

彼が顔を上げ麻奈実がその顔を見ると彼女は驚いてしまう。何せ悲しんでいると思ったら違っていたのだから。正直不謹慎だと思ってしまい怒りがこみ上げてしまうのは仕方ないだろう。

「ロック、何でそんな顔してるの？」

静かだけどしっかりと怒りを感じられる声。普段の麻奈実からは考えられない程に『怒っている』声に性格が変わる前のロックなら背筋が凍る思いをしただろう。

だがロックはそうならなかった。寧ろ闇のような深い笑みを口元で浮かべながら左手の掌に右手の拳をぶつける。静かな室内にバシッという音が響いた。

「まさか欠片どころか『鍵』が手に入るとは思わなかった！　姉さん、その『鍵』は最高の『聖槍（ロンギヌス）』だ。それは神すら殺せる最高の切り札！　京介さんを落とすのに絶対に必要な『主鍵（メインキー）』だ。よくやったよ、姉さん。これなら他の女の子たちから絶対的なリードが取れる。おめでとう、姉さん。これで後は一対一の決闘だ！

京介さんは防弾楯、そしてこっちは神殺しの槍だ。目的まで一気に縮んだ！」

そう語るロックに麻奈実はそれまで感じていた怒りが吹き飛んでしまい、何故ロックがここまで喜んでいるのかが分からなくて逆に怖くなってしまっていた。別人どころか同じ人なのか分からなくなるくらい、彼女にとって今のロックは怖く映っていた。

一頻り喜んだロックは冷め切ったコーヒーを一口飲むと話を再開する。

「さて、姉さんがせっかく手に入れた切り札だが、正直姉さんが使っても効果が薄い。だからそれは俺が使うとして……今度はもう少し健全な話をしようか」

「け、健全？」

「そう……姉さんの今現在の戦況と周りの状況を詳しく掘り下げてみようか。姉さんには悪いが、もう少し焦ってもらわないといけないからね」

そう笑顔で告げるロックに対し、麻奈実はどこか薄ら寒さを感じたのだった。

第3話　こうして彼女は聖母になった

ロック曰く、高坂　京介を攻略するに当たって重要なものが手に入ったらしい。
その事に麻奈実は嬉しく思うのだが、何故だろうか？　ロックのあの深い闇のような笑みを見ていると不安しかない。
だがそれでも優しい彼女は弟を信じて話を聞くことにした。今まで応援してくれた家族だが、ここまで踏み込んでくれたということはそれだけ危機感を感じているからだと思って。
そんなわけでこの恋愛相談は更に続いていく。
ロックは改めて軽く咳払いをしながら静かに語り始める。その様子はやはり中学生には見えない。まるでプレゼンをする会社員のようだった。
「さて、まず姉さん以外に京介さんの近くにいる女性について改めておさらいしようか」
「まるで勉強みたいだねぇ」
「まるでも何も勉強そのものだよ。まず相手の手札を予想出来なければ勝負はしかけられない。無策に勝負に出るのは蛮勇か無能か天然だけさ。勝ちに行くのなら、まず手を読まないとね」

呑気なものだと苦笑しつつロックは姉に言う。
これから始まるのは勉強なんて生やさしいもんじゃない。自分以外の敵の戦力を学ぶという戦略だ。だからこそ、ロックは少しばかり声を真面目なものに変える。
「まず京介さんの妹の学校の友人である『新垣　あやせ』さん。姉さんも知ってる人物だ」
「あやせちゃんのことは知ってるよ。私のお友達だもん」
「姉さんとも知己の間柄である彼女だが、読者モデルをやっているだけあってオシャレで綺麗な美人だ。俺の知る限り京介さんの好みに一番合致しているのは彼女だろう」
「きょうちゃん、まえから黒髪美人に目がなかったからねぇ」
ほわほわとした返しをする麻奈実にロックは危機感のなさが窺えるだけに大丈夫かと心配になってきた。
「そんな彼女だが……端から見て京介さんに気があるのが丸わかりだ」
「……そうかな。あやせちゃん、よくきょうちゃんのこと変態変態って言ってるけど？」
麻奈実から若干間が空いたのは彼女の失敗だろう。すでに分かりきってるとは言えそれでもロックは告げる。
「誤魔化すのは駄目だ、姉さん。既に姉さんも気付いてるだろ。この場で誤魔化したと

ころで何か変わるわけじゃない。はっきりと言うよ……友人であるまえに恋敵（てき）だ。ここから先は譲り合い無しの潰し合い。相手の足を引っ張るのは常套手段だ。だからこそ、姉さんには現状をはっきりと受け止めて欲しい」

「わ、わかった……うん、確かにあやせちゃんはきょうちゃんのこと、好きだと思う」

「よろしい。発言と行動が噛み合っていない上に何かしらあると京介さんに頼っていることからその信頼関係は確実にあるだろうさ。その上感情が高ぶると暴力的になるところさえ除けば家事炊事もばっちり出来る女子だ。他の二名よりある意味彼女が一番危険だと言える」

「最近思うけど、ロックは何でそんなことも知ってるの？」

「世の中情報というのが状況を左右することが多いからね。引き出しは多いに越したことはない」

自分の弟が変わりすぎていることに改めてひく麻奈実。最早別人なロックはどこに行こうとしているのか……。

そんな心配をする姉を他所にロックは話を続ける。顔に多少の緊張が見られることから危機感は感じ始めているらしい。ならばよしとロックは決めた。

「次に挙げるのは京介さんと姉さんの学校の後輩に当たる『五更　瑠璃』さん。通称は黒猫と名乗ってる女性だ。彼女は見た目こそ日本人形のように儚い和装の似合いそうな

美少女だが、その性格が若干痛々しい。既に高校に入学したのだから厨二病はどうかと思うけど。京介さんに今距離が近いのは彼女だ。妹の友人であると同時に自分の友人であり後輩。更に部活動も一緒ということもあってよく高坂家に入り浸っている」

「黒猫さんもきょうちゃんのこと、好きだからね～。あやせちゃんといい黒猫さんといい、きょうちゃんはモテモテだね」

「そこに姉さんも含まれているからね。流石は兄貴分と言うべきだろう。あの人は絶妙なタイミングで漢気を見せる、それも計算じゃなく天然でだ。ある意味人たらしの才能があるんだよ」

「そう言われるとそうかも。でもそれだと無節操な人になっちゃうよ？」

「全部無意識にやってるだけに余計質が悪いけどね。だがそれも姉さんがくっつけば変わるさ。ああいうタイプは恋人が出来るとそれに一途になるからね」

「何でロックはそういうことが分かるのか、私気になるんだけど……」

「さっきも言ったけどこれも情報だよ。大体学校で恋愛関係にある連中を色々と観察していけば大まかな分類分けが出来るからね。その統計結果から予想しての事だよ」

　最早弟がどこに向かっているのか分からない麻奈実。本当に中学生か疑わしい気分であった。

「彼女もまた家事炊事はバッチリのようだ。両親が共働きで忙しいため、妹二人の世話

は彼女がしているらしい。それもあって庶民的に家事炊事のレベルが高い。将来は良妻賢母になれるだろうさ。厨二病なのもいずれ治るはずだから、ソレを見れば彼女も十分危険だ」

今現在発表された二人でさえすでに危険度大の人物である。それ以外にもまだいるというのだから京介の人たらしぶりは相当だとロックは関心半分呆れ半分になっていた。

「そして最後が妹の友人である『槇島沙織』さん。京介さん達と会ったり趣味で動くときは『沙織・バジーナ』を名乗り行動している。その際は敢えて『それらしい』格好を好み、言動や性格などもノリが良い人物を演じているが、その実態は所謂大富豪の令嬢でありそれに相応しい教養を受け自身も立派な淑女をしている。二面性が激しい人物だ」

「そういえばきょうちゃん、結構言ってたかも……『沙織は凄い』って」

「京介さん達の前に出る格好が如何にもなオタクファッションだから気付かれづらいけど、私服の時はもの凄い美少女だよ、彼女。スタイルが年齢に噛み合わないくらい凄まじい上に京介さんの好みに合致してる。少なくても年頃の男なら誰しもが惹かれるね」

「ロックもそうなの？」

「どうだろう。こんな感じになってる身としては、それどころではないのかもしれない。今の俺はそういうことを考える暇が無いと言うべきかな。あまりそういうことに興味

が湧かないんだ」

その答えに恋愛相談に乗ってもらっているはずの麻奈実が逆にロックのことを心配する。弟の精神は異常じゃないだろうかと。もしかしたら友人の赤城　浩平の妹みたいな趣味なのだろうかと思ったのだ。

だからこそ、そんな目を向けられたロックは呆れた目を姉に向けた。

「何を心配しているのか予想が付くから敢えて言わないけど、俺にその手の趣味はない。ただ今は青春より生活ってだけだよ。その内するかも知れないからさ。それよりも今は姉さんだろ。余計な寄り道はしない」

「はぁい、ごめんなさい」

弟を心配したら逆に弟から叱られる麻奈実。これではどちらが年上かわからない。

「お金持ちで美人、その上性格も良しとまさにパーフェクトを地で行く彼女も十分危険な存在だ。京介さんなら相手のそういう上辺の部分しかみないなんて事はしないと思うが……それが逆にまた危ない。彼女にとってそういう素の自分を見てくれる存在というのはそれだけで好意的な存在だ。それも頼れるあの人ならまさに白馬の王子様に見えるだろうさ。今はまだそこまでいってないようだが、いつコロッといくかわかったもんじゃない。そう考えると時間はそこまでないのかもしれない」

以上、３人の要注意人物を上げたロック。

その３人を聞いて麻奈実はむむむと気難しい顔をしたのだが、そこである疑問……というよりも自分にとって一番警戒すべき相手のことだ。
「ねぇロック……桐乃ちゃんは？」
「桐乃さん？……あぁ、妹さんのことか。言っては酷いがあれは論外だよ」
ロックは決めつけるようにそう答えたが、それを聞いて逆に警戒している麻奈実は不思議に思い問いかけた。
「どうして？　ここ最近きょうちゃんと急に仲良くなったよ？」
「確かにそうだし彼女からはブラコンの気を感じるのは確かだ。見た目も綺麗だし成績も優秀、性格に難があるけどそれを除けば美少女だって断言できる。だけどね……どうあがいても『肉親と恋愛は出来ない』」
その答えがやけに断定的なので麻奈実は聞いてしまう。何でなのかと。常識から考えればそうなのにと、分かっていながら。
「でもアニメとかだと本当の妹と恋人になるお話もあるよね」
そんな答えにロックは呆れながらジト目を麻奈実に向ける。
「姉さん、もう少し現実的に考えよう。そういうフィクションは放っといて。いいかい、家族っていうのはどこまでいっても家族であり、そして姉が姉であるように妹はどこまでいっても妹なのさ。それは覆しようがないしどうしようもない事実。そして人間は

本能、それこそ遺伝子レベルで血族との交配を拒絶する。近ければ近いほどにね。それは精神にも現れる。だから近親婚は上手くいかないんだよ。遺伝的にも問題がでるし、精神的にも異常を来たす。だから彼女はあり得ない。それに何より……」

ここで一旦ロックは言葉を切ると、まるで賭博師のような薄暗い笑みを浮かべた。

「彼女達では絶対に気付けない。京介さんが求めてるものを」

「きょうちゃんが求めてるもの？」

その答えに麻奈実が頭に？を浮かべる。

その答えを知っているロックは麻奈実を見ながら答えた。

「姉さん、よく考えて欲しい……京介さんは凄い人だ、とても頼りがいになる。だからこそ、皆が頼り京介さんはそれに一生懸命応えてきた。だが……京介さんを助けようという人はいるかな？　確かに京介さんがそう助けを求めれば彼女達はそれに応じるだろう。しかし、それでは遅い。京介さんがＳＯＳを出す前に察して手をさしのべられるのが正解だ。そしてそれをして京介さんを癒やせるのは……甘えさせられるのは姉さん、貴女だけだ」

その言葉に麻奈実はポカンとしか顔をしてしまう。何故自分なのかと。

その答えを本人以上に知っているのがロックだ。

「京介さんを昔から知っていて、彼が何を考えているのかを察する事が出来て、そのフォ

ローをすることが出来る。誰もが彼を頼る中、唯一彼から頼られる事が出来る、彼が甘えられるのが姉さんだけだからさ。幼馴染みで母性的な女性、それが姉さんなのさ」

「え、そうかな～？」

褒められたことが嬉しいのか頬を赤らめて笑う麻奈実。

そんな麻奈実を見ながらロックは告げる。

「姉さんの不利な事は京介さんにとって距離が近すぎて異性として見られていないということ。だから逆に此方が異性としてアピールすれば京介さんは戸惑うだろう。そして聖母の如く包み込んで京介さんを癒やせれば、その時は姉さん……貴女の勝ちだ」

その言葉に麻奈実が息を飲んだ。

そしてロックは此所で決める。

「姉さん……京介さんを頼る女の子は多いが京介さんを癒やせるものは誰もいない。聖母マリアがいないなら聖母マリアになればいい。その資格は十分にあるんだ。自信をもって京介さんにアタックをかけてくれ。姉さんは唯一の聖母なんだからさ」

この言葉で麻奈実は京介を癒やせる存在になろうと決意を固めた。

そして……。

（さぁ、これで仕込みは上々だ。後は京介さん、貴方の胸に手に入れた槍を突き刺すだけ

だ）

ロックは仄暗い笑みを浮かべた。

第４話　こうしてロックは切り札を切った

高坂家の近所にある公園にて只今二人の男が向かい合っていた。

一人は高校三年生の男である高坂　京介……今回の目玉であり目標である。それに対するのは五厘刈から若干髪が伸び始めた学ランの少年……田村　いわおことロックだ。

何故この二人がこうして会っているのかといえば、そんなことは説明するまでもない。ロックの作戦が次のフェーズに移行したからある。最終フェーズの一歩手前であり、ある意味もっとも重要な部分でもある。此所を失敗すれば今までのものが全て無駄になるのだ。だからこそ、失敗は許されない。

だが、別にロックはそのことに緊張などしていなかった。

何故なら彼はこの会談が絶対に成功すると確信しているからだ。その為の材料は既にこの手にある。その使いどころも既に考えてあるのだ。想定する全ての可能性を丹念に潰していき、その結果が絶対に成功すると確信に至る。故にロックは緊張しない。

唯一の不安要素があるのだとすれば、この場にロックと京介以外の第三者が現れることだろう。それも警戒しているあの３人だった場合は最悪だが、それは『ありえない』だ

ろう。

何故ならこれまでの京介の行動を観察してきた解析結果に基づけば、この男がそういう相手と会うのは決まって一人の時か、もしくは『その手の問題に巻き込まれているとき』だ。

つまり今はその時ではない。だからそういう相手が現れる可能性は極めて低いのだ。

故にロックは緊張しない。この先の話し合いにおいて相手に緊張していると見抜かれるのは宜しくない。会話のイニシアチブを握る事に於いて弱みや虚勢はバレてはいけないのである。

そんなわけでロックは緊張する様子もなく普通に京介に会おうと連絡を入れてこうして公園で合流した。その心臓に姉という槍を突き刺すために……。

「急に呼び出して悪かったね、京介さん。最近は色々と忙しいと聞いていたけど」

「別にたいしたことはしてないさ。それよりもロックから呼び出すなんて珍しいじゃないか？」

「何、我らが兄貴分は随分と女性にモテるようだからね。たまにはこうして男同士の友情を確かめたくなるものさ」

「何がモテるだ何が。モテるんだったらこんな風に独り身なわけないだろ」

「相変わらずの謙遜だね、京介さん。嫌みにしか聞こえないよ、本当に」

互いに苦笑し合いながらそんな会話を始めるのは社交辞令だろう。久しぶりに会ったというほどには時間は経っていない。ロックがこうなってから直ぐに会ったのだから、そんなに時間は経っていないのだ。だから久しぶりという言葉を使うほどではない。

ロックは苦笑しながら鞄にしまっていたものを二つ取り出すと京介に一つ差し出した。

「自分で呼び出したんだからこれぐらいはしないとね。はい、京介さん、コーヒー」

「お、気が利いてるじゃないか。ありがたくもらうぜ」

渡されたコーヒーを受け取ると京介は早速開けて飲み始めた。それを見届けたロックも自身が買ったブラックコーヒーの缶を開けると軽く呷る。口の中にアイスコーヒー特有の風味が広がり濃い苦みが冷たく口の中に広がる。

それをそれなりに味わいながら飲んでいると、何故だかロックは京介から視線を向けられていることに気付き声をかけた。

「どうかしたかい？」

ロックの普通な対応に京介は若干戦きつつ答えた。

「いや、ブラックコーヒーを飲む姿が随分と堂に入ってるというべきか、やけに自然体に飲むもんだからな。昔のロックからは考えられねぇ」

その言葉にロックは苦笑する。最近も身内から言われた台詞なだけにそれほど意外に思われているんだろうと思ったからだ。
「そう言われても俺は困るんだけどね。昔の記憶はあっても今の俺からしたらどうしてああいう性格になったのかわからないくらいだし。こいつに関してはただ性に合ってるからとしか言い様ないよ」
そう答えながら更にコーヒーを呷るロックだが、その姿は誰が見ても歳と合わない。京介はそのためロックがロックだと思えなくなりそうな気分になった。
「そ、それでだな……俺に何か用があったんだろ？　お前から呼び出しなんて早々無いからな。正直気になる」

知人が自分の知っている人間とは思えない変わりぶりに改めて戦く京介。そんな京介に苦笑を漏らすロックは内心でニヤリと笑う。やっと本題が始まるからだ。
「いや何、いつになったら京介さんは姉さんとくっつくのかな……と思ってね」
「何言ってるんだよロック。いつも言ってるけど、俺と麻奈実はそんな仲じゃないっての。まったく、いくら幼馴染みだからってそういう誤解は良くないって前から言ってるだろ」
ロックの問いかけに京介は呆れ返りながらそう答えた。これが彼がいつも幼馴染み

と恋仲じゃないのかと問われたときに答える常套句。本人曰く、『あいつとは孫とおばあちゃんみたいな関係だからな』

とのことだがその指摘がちゃんと機能していることはあまりない。

そういう関係だからこそ、京介は一緒に来て気が楽らしい。気付かぬが故に残酷だとも言えよう。

ロックは過去の記憶でもその台詞を良く聞いている。その時はそんな事言いつつも本当は気になってるんだろっと兄貴分や姉をいじくるのによく使う程度に思っていた。

だが今のロックは違う。その台詞からくるのは完全な否定。『俺は彼女を異性としてみていません』という証明。これで直情的な人物ならその台詞に怒りがこみ上げていただろう。

だがロックはそんな『素直な』性格じゃない。

自身の想定している通りの『答え』に内心で嗤うロック。指を弾きたくなるのを堪えつつロックは如何にも真剣ですという顔を作り京介に向き合った。

「悪いが冗談じゃないんだよ、京介さん。いいかい、これは『冗談じゃない』んだ。いくらこの年の餓鬼であっても、人の気持ちを辱めるようなことはしないよ」

その瞬間にこの場の空気が変わる。

それまであった穏やかな日常のような暖かな雰囲気は消え去り、代わりに現れたのは

奇妙な緊張感が支配する謎な雰囲気。京介は知らないだろうがそれは腹黒い連中が互いの腹を探り合いつつ騙し合いをする時の雰囲気であった。

そんな初めて感じる雰囲気に背筋に氷を入れられたかのような冷たさを感じる京介。その雰囲気の源がロックであるということは鈍感な彼でも分かっている。

そんな雰囲気の中、怪しい光を携えた瞳を持ってロックは京介に問いかける。

「京介さん、逆に聞くけど……どうして貴方はそう思うんだ？」

「え？　アイツは幼馴染みだから……」

その問いかけに対し、京介は若干言葉に詰まらせつつも自分と麻奈実は幼馴染みだからと答える。

想定通り……まさに最高に想定通りなこの現状にロックは口元を吊り上げる。

「京介さん、貴方のその反論は悪いが無効だ。何故なら……世の中にある幼馴染みなんて呼ばれてる連中はそんなに近しいことはしないからだ」

「いや、そんな事無いだろ。現に俺と麻奈実がいるわけだし」

「ソレがおかしいんだよ、京介さん。いいかい、いくら幼馴染みでもそれ以前に男女だ。性別が違うんだよ。それだけで疎遠になるものさ。それは俺の学校にいる幼馴染みの関係の男女が証明してくれる。幼馴染みなんてものは幼い頃に付き合いがあったというだけのことにしか過ぎない。そんなものはただの履歴にすぎないのさ。当人達は成

長すると供に別に動き、やがて全く別の相手を好きになる。幼馴染みというだけでそれ以外はただの知り合いにしか過ぎないのが現状だ。つまりその結果から考えれば京介さん……貴方と姉さんの関係はおかしいのさ。幼馴染みというだけじゃまず成立しない」

如何にもな正論を言うロック。だが京介はそんなことないと答えるだろう。他所は他所、ウチはウチだと。

そこでロックはまず最初の手札を切る。

「京介さん……少なくても姉さんは貴方が幼馴染みだからというだけで慕ってるわけじゃない」

「え……」

「正直に言えば姉さんは京介さん……貴方が好きなんだよ。親しい間柄だからじゃない。異性として、一人の男として貴方の事が好きなんだ。ｌｉｋｅじゃない、ｌｏｖｅなんだよ」

幼馴染みの弟からの驚愕の告白という事実に対し京介は固まってしまう。

今までそんなことはないと否定し続けていた男にとってそんな馬鹿な……と思ったのだろう。

その様子を見てロックは笑う。

「悪いがこれは事実だよ。京介さん、逆に考えてみようか。好きでもない相手に料理や菓子を振る舞い、自宅に泊めるなんてことをする女がいると思うかい？」
「いや、それでも……アイツみたいなお人好しならありうるだろ」
「確かに姉さんみたいなお人好しならそれもあったかもしれない。でもね……『同じ部屋で一緒に寝る』なんてのは善人ってだけじゃあり得ないのさ。善人だったら相手を気にして自分は別の部屋で泊まると言う。それに異性で同じ年頃の男女が同じ部屋にいるんだ、襲われるかも知れないと思ってもおかしくない。そんなことを善人というだけで済ませる事は出来ないよ」
　信頼関係があれば云々ではない。年頃の男の前に見知ってる相手とはいえ異性がいるのだ。思春期ならその現実に暴走してもおかしくないのである。そんな危険性を孕んだ状態で普通にいられるわけがない。これが妹とか姉だというのなら別だが、幼馴染みという親しい『異性（たにん）』に対してはそうならない。
　そして麻奈実の想いをはっきりと証言するための札をここでロックは切った。
「何よりも俺がその証拠だ。姉さんがいくら言っても京介さんは最悪気付かないかも知れない。だからこその俺だ。貴方と親しい間柄でアリながらの第三者。姉さんや貴方の事を別視点で見ていたからこそ分かる。本人達が気付かなくても端から見たら丸わかり、なんてことが貴方達は多すぎる」

ロックはクスクスと軽く笑うが、その様子が京介には少し気味悪く見えた。
そんなロックから更に言葉が紡がれる。
「それにね京介さん……風呂上がりなんていう無防備な姿を晒すのはいくら信頼できる相手でも女性には無理だ。ちなみに俺の記憶では以前風呂上がりの無防備な姿をした姉さんを見かけたときは顔を真っ赤にして怒られたよ。怒られないのは……見て良いのは好いてる相手だけなんだよ、姉さんは」
ロックの言葉に京介の思考が広がっていく。
幼馴染みだからという言葉では解決できない問題があり、それが出来ているということは幼馴染み以上の存在だということだと。勿論それでも彼は否定するが、ここで家族であるロックの真剣な表情がおふざけや誤魔化しを許さない。ロックが言った通りだと、
『京介は思い込んでしまってきていた』
いくらでも穴を付こうとすれば付ける論理だが、歳若い京介ではそれは考えつかない。そして異性の妹という存在がいる身としては宛がってみれば納得がいく話もチラホラとある。何よりも普段あれだけ『あんちゃん』と元気よく慕っていたロックがこんなにも真面目に話しているということが、ロックの話の信憑性をあげる。
更に悪いのは京介がこの時に妹によくギャルゲーをやらされていたことだろう。

ゲームと現実を一緒にするのはおかしいのだが、それでも京介の脳裏には幼馴染みキャラの攻略時の反応が麻奈実と重なったのだ。これは偶然だが、それもまたロックにとって都合良く働いた。

その結果……。

「麻奈実は俺の事を、その……好き……なのか？」

気恥ずかしさと異性として認識し始めたことによる高揚感により京介は顔を赤くしていた。

（よし、上手くハマった！）

ロックは京介の反応を見て口元をつり上げバレない程度に指を鳴らした。

そして更にその抱き始めた感情を後押しする。

「京介さん、よく聞いてくれ。これは身内贔屓にかかわらずの話だ。いいかい、京介さんにお似合いなのは姉さんだと、俺は確信してる。何故なら姉さんだけが『京介さんを助け救い癒やすことが出来る』からだ」

「俺を助ける？」

ロックの言葉に京介は疑問符を浮かべる。

その顔を見ながらロックは笑う（嗤う）。そして最強の切り札を切った。

「姉さんから聞いたんだよ……なんで京介さんが変わったのか……中学の時の話を

さ」

「!?」

その言葉に京介は驚きを隠せない。その表情こそがロックにとっての最大の好機だ。

ロックは姉から聞いた話を改めて京介に聞かせていく。京介は自身の失敗を改めて言われ複雑そうな顔をしていた。

「だけどね……それが正解なんだよ、京介さん」

「……どういうことだ?」

ロックの言葉に京介が反応する。言葉の真意が知りたいという顔をしていた。

「確かに昔の貴方はまさにヒーロー(英雄)だった。餓鬼の俺は貴方に憧れたよ。でもね……今にして思えば最悪だ。ヒーローなんかに憧れるのは、何も知らない無知な馬鹿だけさ。今だからこそ、そう言える。京介さん、姉さんが貴方に告げた通りだ。貴方は『ただの人』でいいんだよ。そうじゃなきゃ貴方は今まで『人を救って来れなかった』からさ」

ロックのその言葉に京介は困惑を隠せず動揺していた。何故ヒーローがいけないのか? 自分がそうなれなかったのは仕方ないにしても、何故そうじゃないほうが良いというのかが分からなかったからだ。

その答えをロックは語る。その時の彼の瞳には薄暗い闇が現れていた。

「ヒーロー（英雄）ってのはさ、単純な物事も劇的なものに変えて大仰しくする。そしてその最後を幸せにするか全て巻き込んで破滅するかの二択しか選ばないのさ。しかもそういう奴らは問題の表面しか解決しない。勇者が魔王を滅ぼせば世界は救われてハッピーエンド。でもそんなものは一時で一時的なものに過ぎない。寧ろその後が問題だというのにああいう奴らはその後はしゃしゃり出ないのさ。渦中の時は図々しく出てくる癖に、自分の出番が終われば後は観客に回ってポップコーンを摘まんでる。彼奴らはその後ことが面倒臭いからって第三者の観客に逃げ込むんだよ。奴らは表面的な部分しか見ないのさだからこそこう言える。変な冒険などせず妥協と調停を持ってより確実な答えを見いだし、責任を持って最後までその問題をアフターケアも込みで解決出来るのは……ただの人だけなのさ。寧ろこれはただの人にしか出来ない」

その言葉を継げた後、ロックは京介を見て不敵に笑った。

「俺の兄貴分はヒーローなんかじゃない。ヒーローなんかよりも余程格好いい最高の男だ。そして姉さんだけがソレを知ってる。姉さんが京介さんに気付かせてくれたんだ。だからこそ、姉さんだけが京介さんを癒やせる。姉さんだけが京介さんを甘えさせられるのさ。京介さんに必要なのは自分の理解者にして自分を包み込んでくれる人だよ」

その言葉に京介は色々と考える事があるらしい。顔が赤いのはロックが突き刺したロンギヌスの槍の成果だろう。京介の中で田村　麻奈実という女性は幼馴染みから自

分を理解してくれる可愛い異性に変わっていた。元から種は蒔いてあったのだ。ロックがやったのが他の種が芽吹く前にその種に肥料を与えたに過ぎない。

この時京介は麻奈実のことを確実に『異性』として意識した。

『そうロックによって誘導されたのだった』

この後二人は別れるのだが、今週の土曜日に麻奈実が京介に田村家に泊まりに来ないかと言っていたことをロックは伝えた。

「さぁ、物語は終了間際だ。他の人達が手を伸ばす前にその手を撃ち払わせてもらうよ。ハッピーエンドを迎えるまで後一手。後は姉さんの頑張り次第だよ。何、安心しなよ、姉さん。貴女の勝ちはもう『確定』済みだからさ」

ロックはそう言いながら夕闇に溶け込むように消えていった。

第５話　こうして『物語の始まり』は始まった

京介はロックによって深く突き刺された『田村　麻奈実』という槍を意識する事となった。

ロックに会う前はただの幼馴染みというだけの存在。だが、ロックの言葉によって判明する彼女からの思慕の念。京介は幼馴染みだから一緒にいるのだと思ってた。ずっと昔から一緒にいたから、その関係はずっと変わらないと思っていた。自分がそうであるように、麻奈実もそうだと思っていたのだ。

だが違っていた。京介が見ていた麻奈実と麻奈実が見ていた京介は違っていた。

京介は幼馴染みとしか見ていなかったが、麻奈実は京介のことを異性として見ていたのだと。勿論性別が違うことは分かっている。だがそうではない。そういうものではなく精神的な部分も含めてだ。

『田村　麻奈実は高坂　京介の事を異性として恋している』と。

彼は考えたこともなかった。

彼女は自分と同じことを考えているとずっと思っていたのだ。それが当たり前であるように、当然の事だと言うように、『高坂　京介と田村　麻奈実の関係』がそのような

ものであると決定付けられているように。

だけどそれは自分だけだった。幼馴染みは自分の事を『男』として見ていたのだと。

そういった事を本人ではなく第三者であるロックに告げられた京介。普通に考えれば寧ろ本人が言った方が説得力がある言葉だが、京介にとってはそうではなかった。寧ろ何も知らない状態でその言葉を麻奈実から告げられたとしても、彼はきっとそれを冗談だと判断しただろう。

だって『そういう関係だから』。『高坂　京介と田村　麻奈実』は『色恋とは関係ない関係』だからと。二人だけで話せばそうなっていただろう。

だがそこに第三者であるロックが入れば話は変わる。

これまでの二人の関係を間近で見続け、尚且つ麻奈実の想いを知っているロックだからこそはっきりと告げることができ、そしてそれを否定することは許されない。

ロックという第三者によって京介はやっと田村　麻奈実という幼馴染みを『異性』として認識することになったのだ。

そしてまだ恋愛をしたことがない男子が自分のことを好いてくれる女の子がいると知ったのならどうなるのか……答えは単純だ。

『気になって悶々としてしまう』

思春期特有の思考に浸りがちになってしまい、それ故に改めて自分の意識が変わって

いくことを自覚する。己の過去の記憶を掘り返し、そして幼馴染みの少女が自分にしてくれた事を思い出して改めて羞恥の感情に襲われる。

正直な話、高坂　京介は今、最も田村　麻奈実のことが気になっていた。それも身内である妹からニヤニヤしてキモいと毛嫌われるほどに。

そんな京介が気になるのは今週の土曜日。ロックに言われた『お泊まり』の日。

その連絡は当然麻奈実からも伝わっており、京介は土曜日に泊まりに行くことが決定していた。これが普通の感性の人間なら問題事になるものだが、田村家と京介の付き合いの深さからそんなことにはならない。既に何度も泊まっていることから親戚が泊まりに来るのと何ら変わらない対応になっていた。それに寧ろ田村家としては逆に『問題事に発展して欲しい』だけに泊まりに来ることは推奨しているくらいである。

今までだったら気安く泊まりに行くだけだった京介だが、今回はそうならない。自分の中でもそのことがより深く意識させられている。

そんなこんなで待ちに待った？土曜日。

京介は麻奈実との待ち合わせ場所である自宅近くにある公園に来ていた。

別に田村家は近所で場所など既に知っているのだから待ち合わせなどする必要はな

いのだが、麻奈実が待ち合わせをしたいというので公園で合流することになったのだ。

「何か……変に緊張しちまうなぁ」

そんなことを京介は呟きながら苦笑を浮かべる。

別に今まで待ち合わせなどいくらでもしてきたのだから今更緊張などしないと思っていたのだが、ロックの所為と言うべきか……何故だかこの待ち合わせがデートのような気分を感じさせた。その所為で妙に緊張をしてしまう京介。

そんな京介の心境など知らないはずだが、彼女もまた緊張していたのだろう。京介の姿を見つけると彼に気付かれぬようにゆっくりと近づいていく。その際に彼女の胸は緊張と不安、そして期待でドキドキと高鳴っていた。

「お待たせ、きょうちゃん」

聞き慣れた声に若干緊張が緩むのを感じつつ京介は声がした方向に振り向く。

「あぁ、まっ!?」

待ったぜ、まったく……そう冗談交じりに返そうとした京介だが、その言葉は途中で驚愕により止まってしまった。

何故なら京介の目の前にいたのは彼が知ってる彼女ではなかったからだ。

「ま、麻奈実、その格好は……」

京介の目の前にいるのは確かに田村　麻奈実だ。それは長年付き合いのある京介な

ら直ぐに分かった。だけどその姿は今までの彼女ではない。
若干茶色がかった髪が背に届くほどに伸び、少しばかり掛かったウェーブが気品さを感じさせる。その目にはいつもあったはずの眼鏡がなく、くりっとした可愛らしい目が京介の姿をしっかりと捕らえていた。そしてその身に纏う服装もいつもよりオシャレを感じさせるものになっており、真っ白いワンピースに薄水色のカーディガンを来ている。その手に持たれてるのは服に合わせた物なのか真っ白い小さなポシェット。
その見た目はいつもの朗らかな彼女ではない。どこかの深窓の令嬢にしか見えず、しかも薄手の服装の所為か身体のライン……特に胸の形やサイズをさりげなく強調しているという思春期の男子を誘惑する姿であった。
そんな初めて見る格好の幼馴染みに京介は驚きを隠せない。想定していたものを遙かに上回り、その『女性らしい』姿に胸の高鳴り顔が熱くなるのを感じる。
「ど、どうかな、きょうちゃん……似合う？」
不安を感じさせるような瞳をしつつ上目遣いで覗き込む麻奈実。その顔は無垢でありながらどこか危うい魅力を感じさせた。
「そ、そのだな……凄い似合う……可愛い……ぜ」
麻奈実の問いかけに京介はタジタジになりながらも何とか答える。その反応がいつもの彼と違い、しかも素直に答えていることが付き合いから分かる麻奈実は笑顔になっ

た。京介はこういうときに嘘はつかない。
「えへへ～、そっか～。きょうちゃん、似合ってるって思ってくれたんだ。良かった～」
不安そうにしていた瞳から不安がなくなり代わりに安堵が宿り朗らかな笑顔を浮かべる麻奈実。そんな彼女の笑顔を見た京介は途端に顔を反らしてしまった。
（あれ、麻奈実ってこんなに可愛かったか!?）
改めて幼馴染みの可愛さとその魅力を感じた京介はドキドキが収まらないことに困惑していた。その所為で彼女の異性としての魅力を再確認する京介。
「と、ところでどうしてそんな格好なんだ？　それにその髪は……」
そんな精神を感づかれたくなくて京介は早口で麻奈実に問いかけると、麻奈実は恥ずかしそうに頬を赤く染めながら答えた。
「そ、そのね……私だってこういう服、持ってるんだよって見せたくて……それにこの髪はウィッグだけどそろそろ『いめちぇん?』っていうのをしようと思って伸ばそうと思ってから」
その姿はこれから先の姿の先取りだと答える麻奈実。
そんな彼女の姿に京介は見惚れてしまう。確かに彼女は自分の幼馴染みだと分かるが、同時にこんなに可愛い女性なのだと認識したからだ。
それと供に今までの自分を呪いたくなる自分がそこにいた。幼馴染みの可愛いさを

まったく実感していなかった自分が愚かで仕方ないと内心苦悩する。
そんな京介の顔を見て麻奈実は心配そうに顔を覗き込んだ。
「きょうちゃん、大丈夫？」
「!?　だ、大丈夫だから……」
間近に迫った麻奈実の顔。普段見慣れている顔だが、そこには彼にとって初めてがあった。
薄らと化粧がが施されていたのだ。それがより彼女の可憐さを際立て、そんな可愛い顔がかなり間近に迫っているというのだから思春期男子は大変だ。京介はドキドキと高鳴る鼓動が耳にまで聞こえてくるのを感じながら顔が更に赤くなるのを感じた。
最初の緊張とはまた別の緊張が京介を支配する。
（あぁ、もう～～～～～～、ロックがあんな事言うから余計に意識しちゃうじゃねぇか！）
そう思いながらも京介は麻奈実から目が離せなくなっていた。
改めて見てもやはり可愛い。それも自分が知ってる幼馴染みのはずなのにまったく違う面を見せられ、その姿に魅力を感じてる自分がいた。
そんなわけでさっきからドキドキしっぱなしの京介。そんな京介に麻奈実は朗らかな笑みを向ける。

「きょうちゃん、家に行く前にちょっとお買い物に行かないと行けないの。今日の夕飯の買い出しとかをしないといけないから。だから悪いんだけど付き合ってくれないかな？」
「つ、付きあッ!?　あ、あぁ、うん、そうだな。良いぜ、それくらい」
付き合うという言葉に過剰に反応してしまった京介は自分の早とちりに自己嫌悪をしつつも何とか立て直す。
そんな京介に麻奈実は満面の笑顔で返した。
「ありがとう、きょうちゃん」
その笑顔に京介は頭がクラっとするのを感じた。

「いわお、やけに楽しそうだな」
麻奈実とロックの父親が仕事の合間に休みに来た居間にて、そこにでコーヒーを様になる姿で飲んでいたロックに話しかける。
ロックは父親にそう言われ軽く苦笑した。どうやら自分でも気付かないうちに笑みを漏らしていたらしい。そのことへの苦笑であった。
「やぁ、親父。何、我ながら恥ずかしいとは思うんだけどね。何、新しい始まりというの

は得てして楽しみなものなのさ。今日、きっと新しい『ナニカ』が始まる。俺はそれを一等席で祝うことが出来るんだ。これほど楽しいことはそうはないよ」

そう答えながらロックは更にコーヒーを呷った。

その姿を見ながら父親は静かに考えこう返す。

「あぁ、そうだな」

こうして『田村　いわおの恋愛相談』は最終フェーズを迎えた。

第6話　こうして彼女と彼は結ばれた

今までとは違い明らかに京介を意識させるような格好にイメージチェンジした麻奈実。

そんな彼女に京介は今まで感じていたイメージが吹き飛ばされ、改めて幼馴染みの魅力にドギマギしていた。

彼は今、まさに、彼女を完璧に『異性』として認識したのであった。

今まではただの幼馴染みだった。でも今はもう違う。目の前にいるのは『可愛い女の子』であると。

それがまさか……ロックの思惑だと気付きもせずに……。

ロックがやったのはごく単純なイメチェン。

世間に於ける『女性らしい姿、造形』というものを麻奈実にさせただけ。

麻奈実自身は当然女子なのだが、その髪型はショート。勿論似合っているし可愛いということは分かるのだが、世間に於ける女性らしさというものは得てしてロングなのである。そして普段とは全く違う姿というのは見る者に深い印象を与えるものだ。その

二つにより『麻奈実＝短髪の幼馴染み』という印象を無くした。

更に服装も普段着ているものから変更させる。ここでロック自身は特に言ってはいない。服装に関してロックは麻奈実にこう言った。

「姉さん、服に関しては新垣　あやせさんに相談するといい。オーダーは勿論、『清楚な淑女風』だ。あぁ、当然京介さんの名を出さないでくれよ。感づかれると厄介だからね。まぁ、既に気付いたところで遅いけど」

ライバルに親交からの善意を用いて協力させたのだ。

何せ相手は現役雑誌モデル。ファッションに関しては此方よりも詳しく流行に関しても良くわかっている。そして麻奈実に世話になっていることから『善意的』に協力を得ることに。まさか相手も此方が『電撃作戦』を仕掛けてくるとは思っていないだろう。向こうに関して多少は申し訳なく思わなくはないが、これも一つの戦争だ。先手必勝とまでは行かなくても先手を取って優位に立つのは当たり前である。

これらにより麻奈実は今までのイメージを払拭し、京介の好みな女の子へと変貌させたのである。

まさかこれがロックが差し向けただろうとは思うまい。今の京介は自身が気付かない内に理想の女の子と相対しているのだ。ロックの誘導もあって胸が高鳴りっぱなしで考える余裕もないだろう。

そんな京介と麻奈実は今晩の夕飯の買い出しと称したデートをすることになったのだが、ここで更に京介をドキドキとさせるイベントが多発した。

スーパーで一つの籠に二人で商品を入れてる最中に二人の手が触れあうことがあり、それを意識してしまって顔を赤くして慌てて手を離す二人の姿があったり、また麻奈実行きつけの商店街の店では二人の仲を見て『まるで新婚さんみたいね』と定番の台詞を言われ真っ赤になる二人。特に麻奈実は京介にナニカを期待する眼差しを向けているだけに京介は余計ドキドキするハメにあった。

と、そんなこんなで買い物を終えた二人は田村家に帰還。

「やぁ、京介さん。いらっしゃい」

居間で会ったロックは京介にそう言葉をかけると京介もやんわりと言葉を返す。その様子はいつもと違い若干落ち着きのなさを感じさせており、ロックはそんな京介を見ながら笑みを深める。

「経過は良好、槍は見事に効果絶大ってところか……悪くないね」

そうして始まったお泊まり会。

京介はいつも通り行き慣れたはずの麻奈実の部屋に行くことになったのだが、そこで

奇妙な居心地の悪さを感じる。見慣れたはずの部屋なのに、どういうわけか彼方此方が気になって視線が彼方此方に移動する。その度に見つけるのは今まで知らなかった彼女の女の子っぽさ。タンスの上に置かれた小物や小さなぬいぐるみ。ベットに置かれているファンシーなクッション。また勉強机の上に置かれているパステルカラーの文房具、そして写真立て。写真には麻奈実と京介のツーショットが取られていた。

それらが余計に京介の意識を刺激する。今まで自分がどれだけ周りを見てこなかったのかを。そして麻奈実がこんなにもも可愛い『女の子』なのだということを。

知っているはずなのに知らない場所。よくよく感じてみると自分の部屋にはない甘いような香りも感じる。ソレが更に胸をドキドキとさせた。

そんなこともあり、京介は更に麻奈実を意識することに。それが麻奈実にも伝わっているからか、彼女もまた恥ずかしそうに顔を赤らめていた。それが可愛らしいものだから、更に京介の胸をトキメかせる。

既に見た限りでは付き合い始めたカップルにしか見えない二人。

それは家族から見て実に微笑ましものだ。故にロックは家族……特に祖父に良く言い聞かせる……茶化すなと。理由は単純、余計な真似をされて台無しにされたくないからだ。

そんなわけで初々しい二人はお互いに気恥ずかしいながらもどこか嬉しい時間を過

ごし、そして夕方になると麻奈実は夕飯の支度を手伝うということで台所へと向かう。
その後ろ姿を見ながら京介も部屋を出て居間に向かうことに。本当は麻奈実に手伝いを申し出たのだが、女の城たる台所に男子入るべからずと言うべきか、麻奈実に止められたのだ。いつものお泊まりならそんなことを言い出すこともなかったのだが、何故か今日はしなければいけないと京介が思った事が内心嬉しかったらしい。麻奈実のそんな優しい笑顔に京介が見入ってしまったのは仕方ない事なのかも知れない。
居間に向かった京介が見たものは、コーヒー片手にニュースを眺めているロックであった。
「それ、面白いか？」
見ているニュースを指さしながら京介がそう問いかけるとロックは軽く指を口元に添えながら答える。
「面白いか面白くないかで言えば面白い話ではないかな、これは。でも考えさせられる話題ではあるさ」
そう答えるロックが見ているのは政治の話だ。政治に興味が無い京介としては何を言っているのか2割も分からない。
だがロックは分かっているらしい。彼は京介が何かを聞く前にこう答えた。
「何、皆お題目を掲げて大層なことを言っているけどやっていることはただの釣りだ。

皆に美味いと思わせる餌を釣り針にかけて世論や支持を大量に釣り上げたいだけ。その実自分達は危害が加わらない安全圏で保身に走ってる。ここで仰々しく叫んでる連中は政治家じゃなくて政治屋だよ。政治家以下の下衆に過ぎないのさ。本気で何かを変えるというのなら、その時は仕えるリソースを全て使い切って賭けに出なければならない。賭けられない奴に未来はないよ」

そう答えながらコーヒーを呷るロック。

そんなロックに京介は何とも言えない顔をしながら突っ込む。

「本当にお前、中学生かよ」

「最近よく言われるけど、それでも俺は中学生だよ」

そう答えるロックと共に京介はずっとテレビを見ていることにした。

そして時間が経ち夕飯。夕飯の献立は良くある和食。白米に味噌汁、肉じゃがに玉子焼き等々。それらを田村家の皆とちゃぶ台を囲んで食べる京介。

その味に美味いを舌鼓を打つ京介。そんな京介に麻奈実は嬉しそうに微笑みを浮かべる。そして黙っていられないのが田村家の面々だろう。

麻奈実の母親がこの料理は全部麻奈実が作ったものだと告白する。

それを聞いた京介は驚き関心すると、麻奈実は気恥ずかしそうにえへへっと笑った。

そんな彼女を見てロックは更にワントラップ入れる。

「それに京介さん、この卵焼きを食べて見てくれないか」
そう言いながら差し出されたのはロックの方に置かれていた玉子焼き。勿論京介の方にも卵焼きは置かれている。
それが分かっていながらも何か意図があるんだろうと読んで京介は差し出された玉子焼きを一口摘まんだ。
「え……これ、俺のと味が違う……？」
自分の玉子焼きと同じはずだと思っていたが、味が違うことに驚く京介。そんな京介の反応を見ながらロックはクスリと笑う。
「姉さんが京介さんのために味分けをしたんだよ。何せ京介さんの味の好みは分かりきっているからね。今日の料理も全部京介さん好みの味だ。どれだけ京介さんの事を想ってるのかが良くわかるよ」
「ろ、ロック！　そ、そんなこと、ない……とはいえないなぁ……」
ロックに言われ顔を真っ赤にして慌てる麻奈実だが、この歳不相応に落ち着いたロックの分かりきっているという笑みに反論は出来なかった。何よりも言っていることが事実なだけに素直になるしかなかった。
「そ、そうか……何というか……美味いな、麻奈実」
「あ、ありがとう、きょうちゃん……」

自分のために自分の好みの味付けをしてくれたことが嬉しくて、それでいて自分のことを理解してくれていることに京介は恥ずかしさを感じながらお礼を言うと、麻奈実も気恥ずかしさから顔を赤らめつつもお礼を返す。

そんな如何にも初々しい光景に田村家の面々が暖かな目を向けるのは無理もないだろう。

そんな感じで夕飯は過ぎた。

そして時間は更に深まり、そこで風呂上がりの麻奈実と京介がブッキングするなんていう定番イベントが起こり、まぁ何とも思春期にありがちな嬉し恥ずかしい展開に。それがまさかロック達によって引き起こされていることを知らずに両者はより意識することに。

そして最終局面……就寝。

京介が泊まるのは当然麻奈実の部屋。いつも通りの展開だが、二人の状態は『いつも通り』ではない。

（くそ～、何か全然落ち着かねぇ！）

京介は麻奈実を異性として意識してしまい、彼女が近くにいることにドキドキしてしまっており、また麻奈実も今晩が勝負だと分かっているからこそ顔が紅くなるのを感じ

ている。

勿論不安だって大きい。今まで打ち明けなかった想いを改めて告げるのだ。振られた場合、京介の前では何とか笑みを浮かべるが、京介が去った途端に泣き出してしまうかもしれない。彼女にとってこれほど恐ろしいものはない。

だが、それでも絶対に告白するのだと、彼女は意気込む。何せ今回は弟が自分の為に色々と頑張ってくれて相談に乗ってくれたのだ。弟の為にもこの想いを告げなくてはと。

それにロックは言っていた。

『何、そんなに不安にならなくてもいいさ。言い方が悪いがこれは出来レースだ。既に勝敗は決定してる。京介さんに刺さった槍は的確に心臓を捉えてるからね。外す方が無理さ。姉さん、貴女の勝ちだ』

とのこと。何を根拠にそう言うのか分からないが、今のロックには妙な説得力がある。だから麻奈実はそれを信じて突き進むことにした。

互いに意識しているだけに相手が眠りについていないことが良くわかる。だからこそ、京介は麻奈実がしていることに直ぐに気付いた。

（なっ!?　麻奈実、何俺の布団に入って来てんだ！）

布が擦れる音と共にめくられる布団の感触、そして背中に感じる自分とは違う温も

り、そしてそっと触れる女の子の柔らかい感触に京介の心臓がバクンバクンと高鳴った。

そんな京介の驚く通り、麻奈実は京介のもとまでたどり着く。

「きょうちゃん……起きてる？」

小さい声だが京介の耳にはしっかりと届いた。

「あ、あぁ、起きてる……」

本当は何で入ってきたとか色々と聞きたくなる京介だが、それは彼女の方を振り向いた瞬間に忘れた。

何故なら麻奈実の方を見た瞬間、彼女が京介をぎゅっと抱きしめたからだ。自分の胸辺りに同じように胸を押しつけ、顔はキスが出来るほどに近づく。その表情は真面目なような緊張しているような顔である。それだけでもアレなのに、京介の身体は更に強張ることになった。

胸に感じるのは男にはない柔らかなでありながらボリュームを感じさせる感触。それが薄い布越しで感じられることで彼女が下着を着けていないことが窺える。（女性は寝るときにブラジャーを付けないものらしい）そして京介の鼻腔をくすぐる男ではあり得ない甘い香り。

感触に香り、そして自分を見るめる熱の籠もった瞳。年頃の男にならまずノックアウ

トされるような光景がその場にあった。

故に京介は麻奈実に何かを問いかけることが出来ない。ただ彼女に自分のドキドキが伝わらないかが心配だった。

そんな京介を分かってるからなのか、彼女は真剣ながらに少しだけ微笑みそして口にした。

「きょうちゃん……私ね……きょうちゃんのこと……好き」

抱きしめられながらの告白。それを聞いて京介は幼馴染みが女の子であるということをより意識させられた。

今まで一緒にいたのだ。相手が本気なのかどうかなんて、その声を聞いただけで分かる。それに気付かなかった今までの自分はきっと気付かぬふりをしていたのだろう。何故なら、もしその想いを聞いてしまったら、『幼馴染み』という関係が壊れてしまうと思ったから。

だから気付かぬふりを無意識にとっていた。自分と彼女は幼馴染みなのだと決めつけて、その関係が絶対に壊れないようにしようとした。気付かなければずっと続くと思ってたから。

でも……もう無理だ。

だって気付いてしまった。彼女の想いに。告げられてしまった、彼女の告白を。

京介の頭にそんな思考が過ぎる。その僅かな時間に麻奈実は更に京介を抱きしめた。
「女の子として好きなんだよ。私ね、きょうちゃんの恋人になりたい。それできょうちゃんともっと一緒に色々なことを経験して笑いあって、そして結婚してきょうちゃんとずっと一緒にいたいの」
そこにあるのは真の愛。不純物など一切無い高坂　京介への愛だ。
その言葉に京介はドキドキする。当たり前だ、これは彼にとって初めての告白だからだ。
そしてその答えなど、今抱いている感情を分かれば決まってる。
確かに京介の周りには魅力的な女の子は一杯いる。皆美少女だ。一緒にいて楽しいと思う。でも……こんなドキドキして暖かく、それでいて胸を締め付けられるような気持ちを抱いた相手はいない。目の前にいる女性だけにその感情が発生するのだ。
だから京介は笑顔を浮かべようとする。きっと緊張で変な顔になっているし、顔が熱くて仕方なく真っ赤になっていることは分かりきってる。それでも、彼女には笑顔で答えたかった。
「あぁ、麻奈実。俺もその……お前のこと、好きだ。たぶんだけど……今、初めてお前に恋してる。それでお前のことが、その……愛おしいって思うんだ」
「きょうちゃん！」

京介の返事……告白を受け入れ自分もそうだと答えてくれた。

それに感極まって麻奈実は京介更に抱きつくと泣き始めてしまう。彼女にとって積年の想いが成就した瞬間であり、この涙は感動と喜びからだ。

そして二人の顔は自然と近づき、静かに合わさる。

「……キス、しちゃったね」

「……あぁ」

思春期な男女がテンションを上げるとこんあことが起こる。本人達からしたら自然となったことなのだろう。互いに引き寄せられるとかなんとか。告白成就とその時にキス……まさに少女漫画のような展開。互いに気恥ずかしさを感じつつも嬉しさから笑みがこぼれる。

今まさに布団の中で一組のカップルが誕生した瞬間であった。

だが、ここで男女の差というものは出るものだ。

京介は少しだけ身体を離した麻奈実を見てある場所に目が行ってしまう。

それは胸元。若干着崩れはだけたパジャマから彼女の胸の谷間が覗いてしまっていたのだ。思春期男子ならば誰もが目を向けてしまう光景。それも京介の予想外に麻奈実のバストが大きいこともさらに拍車をかけた。

そんな視線を向けられて女子ならば誰もが怒るであろう状態。

だが彼女は今、正常にあらず。恋が実を結び恋人同士となった喜び、そして今まで意識してくれていなかった彼が自分を性的な目で見てくれるという女としての悦びの二つにより……暴走していた。

故に彼女は顔を赤らめながら京介の手を自分の胸に押しつけながら、潤む瞳を京介に向けてこう言った。

「きょうちゃん、その……いいよ、きょうちゃんになら。だから……優しくしてね」

少女と女、二つの魅力を備えた可憐でありながら妖しい笑み、そして殺し文句。京介は自分の中にある鎖が弾け飛ぶ音を聞いた。

「麻奈実ッ!!」

「きょうちゃん、来て」

そして二人は溶け合うように重なった。

二階のとある部屋が妙に軋むような音がするようだがロックはそんな事を気にすることなく一階の居間にいた。

「まだ寝てないのか、いわお」

そう声をかけたのは父親だ。どうやら居間に用があってきたらしい。他の家族は皆朝が早いので寝ている。

父親の登場にロックは少しだけ優しい笑みを浮かべながら答えた。

「幸せなカップルのお邪魔虫はよろしくないからね。今『ナニ』をしているのか予想が付くから気を遣ってるんだよ。邪魔はよろしくない……だろ」

その言葉を肯定するようにギシギシと二階のどこかが軋む。

その言葉の意味が分かる父親は少しばかり複雑そうな顔をした。愛娘に恋人が出来たことが嬉しのだが、その後直ぐコレは如何なものかと考えさせられる。まぁ、積年の想いが成就したことは素直に祝いたいし、相手が自分達が望む相手だから喜ばしいのだが。初孫がどれくらいで見れるかなぁ、なんて少しばかり逃避もした。

そんな父親にロックは苦笑を向ける。父親が考えていることが手に取るように分かるからだ。親というのは難しいと思わざる得ない。

そして父親は少しそんな顔をすると、台所に行って何かごそごそとしはじめた。

待つこと数分、その手には二つの缶ビールが持たれている。

その持っている缶の一つをロックに向かってほいっと投げた。ロックはそれを受け取ると苦笑しながら話しかける。

「俺は未成年なんだけどな」

「今回だけは付き合え」
そう答えると父親は缶ビールのプルタブを開ける。
プシュっと爽快感がある音がなり、それが喉を鳴らせる。ロックも同じようにプルタブを開けた。
そして二人で飲もうと言うときにロックは少しだけ待てと止めた。
「せっかくだから乾杯しようか」
「何にだ？」
分かりきった質問だろう。父親自身分かっていて聞いている。その介錯をすべくロックは大人のような笑みを浮かべながら答えた。
「新しいカップルの門出とこれからの幸せを祈って……」
「「乾杯」」
そして静かな居間にて、二階のどこかでなっている軋む音をＢＧＭにしながら二人の男が酒を飲んだ。

第7話　こうしていわおはロックと成った

はれて恋人同士となった京介と麻奈実。

「きょうちゃん、えへへへ」

「どうしたんだ、麻奈実」

「何か幸せだなぁって。こうしてきょうちゃんと一緒にいるだけで笑顔になっちゃうんだ」

「っ～～～～～～!?　あぁ、もう、こいつぅ。可愛過ぎるんだよ、この～」

「キャーーーーーーーーーーえへへ」

今まで燻っていた分だけイチャつく様はまさに紛う事なきバカップルであった。

そんな幸せそうな姉を見てロックは満足する。弟からすればこれまでずっと拗らせていた長すぎる片思いがやっと成就したのだから。まったくもってめでたいことである。

こうして麻奈実の恋愛相談という彼女の物語はハッピーエンドを迎えた。彼女は最愛の人と結ばれ、また京介も本当に大切な人に気付きくっついた。田村家の皆からは淀みない喝采と祝福の声が上がりまさに幸せまっしぐらな最高のグッドエンディングだ

ろう。

物語としてはまさに最高の出来だと言える。

だが、これは本にあるような話ではない。現実なのである。現実である以上、『全てが幸せになれる』なんてことは絶対にない。光があれば闇があるように、幸せがあればそこに必ずすくなからずの不幸が存在するのだ。

確かに京介と麻奈実に幸せが訪れた。この先二人が別れるなんていうことは見た限りあり得ないだろう。田村家の皆も皆嬉しそうだ。

だが……京介を少なからず慕っていた『他の女性』はどうだろう？

決まっている。皆少なからずショックを受けた。

彼への想いを自覚している者は悲しみと悔しさで泣き叫び、自覚はしてないものの抱きつつあったものは何とも言えない微妙な顔をする。取り乱す者もいただろう。

現実とは得てしてそういうものであり、誰かが報われれば誰かが報われない。学校なんかの受験と一緒だ。誰か受かれば当然誰かは受からないのである。京介の隣にあるのはたった一枠のみ。そこに誰かが収まれば残りは皆受からない。世の理としか言い様がない。

だがここでロックから言わせてみれば、そこで不平不満を漏らす輩は皆ただの負け犬だ。此方は京介を落とすために相応の努力とアクションを起こし、そして射止めた。そ

れをしない者達に謂われはないのである。
まぁ、そんなわけで幸せな二人の影は多少の者達の影があるわけなのだが、それはそれ、これはこれである。幸せな二人にはあんまり関係が無い。
多少の不幸はあれど、こうして二人の『恋愛』は始まったのだから。

だが、それにケチを付ける者がまだいようとは……ロックは思いもしなかったのだ。それも予想外の人物に。まさかここまで『拗らせている』とは思わなかった。
それは二人が交際を始めてから約二週間が経過した頃、大体周りが落ち着き始めたときに起きた。
端的に言えばロックがとある人物に呼び出しを受けたのである。それもこの『麻奈実の恋愛物語』に於いてもっとも注目を浴びない人物にだ。
「何で俺は呼び出されたのかな……高坂　桐乃さん」
夕暮れ時の公園にて、ロックは京介経由でこうして桐乃に呼び出された。
目の前にいるのはまさに今風の格好をした女子。モデルをやってることもあってスラッとした身体は魅力的であり、異性であるロックからしても格好良く見える。
そんな彼女だが、その表情はあまり良いものではない。彼女が不機嫌なのは京介を観察すると供に見ていた事で分かっているが、それに加えて今の彼女はロックのことを敵

を見るかのように睨み付けている。まるで炎のように燃えさかる怒りを叩き付けられているようだ。正直普通の学生なら怖さのあまり怯えてしまうかも知れない。

そんな怒気を受けながらも平然と流すロックに桐乃は今にも食いつかんとばかりに怒りに満ちた目で睨み付ける。

「アンタね！　アンタがちょっかいをかけたからアイツは!!」

憤怒のままにロックにそれをぶつける桐乃。そんな桐乃の言葉を聞いて大体の事を把握した。ロックが知る限り、彼女は素直に認めはしないがブラコンだ。それも独占するタイプの性質が悪いものなのだ。当然気が強い彼女は認めはしないが、京介の行動一つに文句を付け続け、尚且つ最終的に京介に頼ってばかりという辺りは相当なものだろう。

そんな彼女が言いたいことは勿論最近の事……即ち京介の事だろう。

京介と麻奈実が付き合い始めたことが彼女には我慢できなかった。彼女にとって麻奈実という人物は大好きだった兄を変貌させた悪人という認識だ。言うなれば元凶である。そんな人物が兄と交際するというのが耐えられない。だからこうして怒り狂っているというわけであり、それをけしかけていたのがロックだと彼女は言いたいらしい。

「言いがかりはよしてくれないか？　俺は何もしていないよ。姉さんが京介さんのこと

を好きだからこそ、こうして告白して付き合ってるんだ」
「嘘よ！　あの地味子がそんな急に行動を起こすはずがない！」
「姉さんのことをそういうのはあまり関心しないなぁ。それに地味というのは言い換えれば貞淑だということだ。良妻賢母には必須なものだよ」
　ロックがそう言うと彼女は更に怒る。既に限界を突破しているんじゃないかと思うくらいその顔は赤い。
「五月蠅いッ!!　あの地味子が……マナちゃんがそんなに急に動くはずない。それにアイツがソワソワし始めたのはここ最近、そして最近あった事と言えばアンタが倒れておかしくなったってこと。つまりアンタが何かしたからこうなったのよ！」
　言いがかりではあるが的を得ている発言に内心ロックは関心する。ただのブラコンだと思ったが、どうやら以外と頭は回るらしい。
　だからこそ、少しばかり解禁する。
「そこまで言われては何もしていないとは言えないな。確かに俺はあの二人の交際に関し少しばかりは関わりは持っている。だがそれはただ姉さんの相談に乗っただけだよ。それ以外は特にしていない」
「っ!?　それがちょっかいだって言うのよ！　アンタの所為で！」
「それは待って欲しい。何度も言うが、俺はただ姉さんの相談を受けただけだ。それが

京介さんと付き合いたいというものだったわけだが、別にしたのは何てこと無い普通の相談だよ。それにしてもさっきから随分とお怒りのようだが、何故そこまで怒っているのか俺には分からない」

その言葉が余計に桐乃の怒りに火を注ぐ。

「はぁ？　巫山戯んじゃないわよ！　許せるわけないじゃない、アイツを堕落させたマナちゃんを。そんなマナちゃんがアイツと付き合うことなんて絶対に許せない！」

その言葉にロックは呆れた表情を浮かべる。

「君が言っているのはただの私怨だろう。それで京介さんを縛り付けるのは同じ下の者として関心しない。逆に言えば俺が姉さんの相談を受けたのは姉さんの幸せを願ってだ。身内が幸せになる手伝いをする。それは身内として当たり前の事だろう。君がやっているのは真逆だ。京介さんの幸せに水を差す気かい？」

そう答えるロックは微笑みを浮かべる。まさに聖人君子のような笑みと言えるだろう。

それが桐乃には我慢できなかった。

陸上部仕込みの脚力をもって一気にロックとの距離を詰めると躊躇することなくロックの頬に平手を叩き付けたのだ。

「!?」

流石のロックもコレには驚く。単純に驚いただけだが。

そして桐乃の怒りは業火となった。

「アンタのその面を見て分かった……アンタが今回の事の犯人だってこと。アンタがマナちゃんを唆してアイツにけしかけたってことがね！」

「さっきも言ってるがそれは言いがかりだと」

「嘘ね！　確かにアンタが言ってることは世間一般からすれば正しいのかもしれない。でもね……その顔！　その顔でそうじゃないことがわかる！　アンタのその顔、陸上の大会の時に見たことある顔よ。それも卑怯な事をバレないようにして自分達の都合の良いように競技を運ぶ汚い大人の顔、今のアンタはそんな顔をした。それはマナちゃんの幸せを願ってる顔じゃない。それは自分が思うようにマナちゃんを動かして自分が思い描いた形に物事を成す下衆の顔よ！」

その言葉にロックは少しだけショックを受ける。

自分ではそんなことはないと思っているはずなのに、何故かショックを受けたのだ。

今にも殴りかかりそうになっている桐乃。そんな彼女にロックは熱を持ち始めている頬を意識しつつも答える。

「それは言いがかりだし、何よりもそんなつもりはない。そして此所が重要だ。いくら俺でも子供の癇癪に付き合い続けているほど暇ではないからね。君がいくら喚こうと

京介さんと姉さんの仲は決定している。既に振るったサイの面は決まっているんだ。それを気にくわないと喚くのは結構だが、それで京介さんを不幸にすることだけは間違っている」

ロックの言葉に桐乃の顔が一瞬だけ曇る。

それを見逃さないロックはここに来て、初めて『汚い大人の顔』をした。

「良く聞けよ、小娘。アンタが認めないと喚くのは結構だが、いくらしようが負け犬の遠吠えに変わりはない。アンタが今から二人の間に割り込もうとも結果は絶対に覆らない。アンタが京介さんのことをどう思おうとも勝手だが、それは絶対に叶わない。無理に叶えようとしてもその先にあるのは絶対不可避のバッドエンドだ。誰も幸せにならない。喚くのは結構だが、アンタの不幸に京介さんを巻き込むな。アンタが言ってることはそれこそアンタが言う下衆そのものだってことを自覚しろ……負け犬の小娘」

普段のロックよりも凶暴な言葉遣い。それでいて不相応な大人らしさはより極み、まるでマフィアの頭目のような貫禄を見せつける。その目は桐乃を見ていない。桐乃を見ている目はまるで豚を白い目でみるアレと一緒だ。唾棄すべき汚物を見るような、そんな腐った目。

それを向けられた桐乃は一瞬で頭に昇った血が引き下がるのを感じ、そして恐怖に身体が震え出す。

目の前にいるロックが何なのか、その人に向けてはならない視線に晒されて怖くて仕方なくなったのだ。とても同じ人間には思えない。

その視線に耐えられなくなったのか、彼女は逃げるようにその後を去って行った。

その背中を見送るロックは自嘲気味な笑みを浮かべている。その心には内心少なからず考えさせられることがあった。

その日の夜、ロックは父親と二人でいた。既に母親や祖父母は眠り、麻奈実は明日の京介とのデートに胸をときめかせている。

「なぁ、親父……聞いてくれないか」

そうロックは父親に声をかけると桐乃との話をやんわりとした感じで話し始めた。

「どうやら俺は人を駒のように使って弄ぶ最低野郎らしい。そんなことは思ってないつもりだったんだが……何故だか否定できない気がする」

自嘲気味にそう語るロックに父親はゆっくりと考えると静かに答えた。

「確かに否定出来ないならそうなのかも知れない。お前が麻奈実を動くように指示していたことは事実だしな。でも同時にお前は麻奈実の幸せも確かに願っていた。ならそれは両方ともそうだったってことだろう。弄んだとまでは行かないが、お前は上手くいく状況を楽しんでいたのかも知れない。そして同時に姉の幸せも確かに願ったんだ。

どちらかしかないというのは難しいからな。それは世の中よくある話だ。俺だって一緒だ。お客さんに美味い和菓子を出したいと心がけるが、ソレと同時に利益が欲しいと考える。どちらも譲れないだけに不純にも思えるが、それが社会というものだ。お前は年頃にすれば間違っているのかもしれないが、社会的には間違ってはいない。俺はお前を責めることは出来ないよ」

「そうか……」

その答えを聞きながらロックは静かにコーヒーに口を付けた。

結局のこの問題に答えなんてないのだろう。なら自分はどうするべきか。どうあるべきか、そう考えた。

「早く行こうぜ、いわお」

「いわお、置いてくぞ」

「何してんだよ、いわお」

目の前で早く来いよと急かす友人達。

そんな友人達に向かってロックは不敵な笑みを浮かべこう言うのだった。

「俺はいわおじゃない。ロック……そう俺はロックだ。だからこれからはロックと呼んでくれ」

こうして彼は『ロック』となったのだ。その目に映るのは夕闇の狭間かもしくは真っ暗な闇か……それを知る者は誰もいない。だからこそ、それを決めるのは彼自身だ。その瀬戸際を見極めるために。

『俺妹のいわおがこんなにロックなわけがない』……完ッ!!